

「画家が見た子ども展」

三菱一号館美術館（東京・丸の内） 2020.02.15～06.07



開館 10 周年を記念する本展では、19 世紀末パリの前衛的芸術家グループ「ナビ派の画家たち」が追求した親密な主題の中から「子ども」に焦点を当てて、都市生活や近代芸術を「子ども」との関係として検証している。

この「ナビ」とは、ヘブライ語で「預言者」という意味を持つとされ、1888

年頃に 10 数名の若い画家たちにより結成されたグループによると、「絵画とは二次元の平面に描かれるものだ」とされ、それまで誰も表現したことがなかった意識を持ち込んだ。そして、“柔らかな色彩と平面的、装飾的な画面構成を特徴として、都会的で洗練された画風を有すること”が特徴であるとされている。

展示作品は、フランス・ル・カネの「ボナール美術館」の全面協力のもと、国内外の美術館および当館所蔵品から「ゴッホ、ボナール、ヴァロトン、ドニ、ヴェイヤール」など「ナビ派」の油彩・版画・素描・挿絵本・写真など「約 100 点」を展覧している。特に、「ボナール」「ヴェイヤール」は、柔らかな光に濃密で繊細な筆触による室内画を得意としたため「親密派」と呼ばれている。

ボナール 《家族の情景》 1893 年 リトグラフ 上図 左
モーリス・ドニ 《赤いエプロンドレスを着た子ども》 1897 年 油彩/厚紙 上図 右



ボナール 《乳母たちの散歩 辻馬車の列》 1897 年 リトグラフ/紙 左
ヴェイヤール 《赤いスカーフの子ども》 1891 年頃 油彩/厚紙 右